

心のバリアフリーがあふれるまちを

私は「未来の東京」を、誰もが安心して快適に暮らせる街にしていきたいです。街中で困っている人の様子を何度も見かけたことがあり、高齢者、視覚や聴覚などに障害がある方にとっては、現在の東京は暮らしやにくい場面もあると考えるからです。それらを改善するため、私は路上の放置自転車、狭い通路、座ったままでは届かない位置にあるものなどといった、物理的なバリアをなくすだけでなく、一人ひとりが多様な人のことを思いやる「心のバリアフリー」を広げていきたいです。

私は小学三年生から六年生まで、ベトナムに住んでいました。そこで、現地の路線バスに何度か乗ったことがあります。そこにはたくさんさんの違いがありましたが、一番印象に残っているのは、公共の場での人と人との関係

です。

日本は、線路への転落を防ぐ工夫やノンステップバスなど、バリアフリーの環境が整っている場所もあります。しかし電車の中では席が空いていたらすぐに座り、スマホを見てイヤホンをつけ、自分の世界に入り込んでいる人が多いと思います。マタニティマークの人や、杖を持った高齢者が立っているのを見かけたことがあるのですが、席を譲る人はあまり多くないように感じます。このように、日本は周りの人に気を配り、思いやりを持っている人が少ないと思います。

一方、ベトナムは路線バスに乗る際、バスには高い段差があり、高齢者や子供にとってはとても乗りにくい環境なので、バスの中で切符を売っている人が手を取って

お客さんをバスに乗せて、荷物を運ぶのを一緒に手伝ってくれます。私と弟が乗った時には、すぐにみんなが席を譲り合い、言葉は分かりませんが楽しそうに話しかけてくれました。周りに座っていた人がバス専用のアプリを見せながら「ここで降りればいいよ。」と、とても親切に教えてくれました。そのおかげで、私はベトナムの路線バスにスムーズに乗れるようになりました。

日本もベトナムのように、多くの人に配慮した施設や設備を整えるだけでなく、一人ひとりが周りの人を大切に思い、思いやりを持って行動していくことが重要だと思います。

私の母は、ベビーカーを押していた時にエレベーターが近くに無くて困ったことがあったそうです。その時、二人の大学生が「お手伝いしましょうか。」と言ってベビーカーを持って一緒に階段を上がってくれたそうです。「とても助かったし、心が温まったよ。」と言っていました。このようなちょっとした心がけでみんなが快適に過ごせると思うので、勇気を出して、困っている人がいたら声をかけることを実践していきたいです。

それを多くの人に実行してもらうために、義務教育で

ある学校の授業内で、生活に困っている人たちの気持ちを考える機会を作ることを提案します。授業内では、高齢者、視覚や聴覚に障害がある方、妊婦さんの疑似体験をします。そうすることで、今までよりも助けが必要な人の気持ちを理解できるようになり、困っている人を助ける人が増えると思います。

このように、私は「心のバリアフリー」を意識し、困っている人がいたら積極的に声をかけ、誰一人取り残さない社会を作っていきたいです。

